

地震で被災した土蔵の修復を 左官の技術習得の場として 「輪島塗」を守ろう！

特定非営利活動法人 輪島土蔵文化研究会 [石川県輪島市]

設立年月 2007年10月
メンバー数 10名
代表者名 萩野 紀一郎
〒920-0992
石川県金沢市上柿木島 4-1 202
連絡先 水野 雅男
TEL 076-263-6380
FAX 076-263-6384
mmasao@mb.infoweb.ne.jp
http://wajimadozo.sakura.ne.jp/

わたしたちについて
能登半島地震で被災した土蔵を修復することを通じ
て、輪島塗ギャラリーや土蔵レストランなどの新た
なまちづくりの拠点を創出するとともに、左官職人
の技術を改良し継承することを推進している。

活動の目的
輪島塗の技術継承と、被災した土蔵の修復を目的とし
て、左官職人の技術習得の場として「輪島塗」を守
ろう！

テーマ | 被災土蔵を「左官技術研修蔵」として修復活用する事業

地域の概要 | 輪島市は、能登半島の北部に位置するまちで輪島塗や朝市で有名。現在の人口は約3万2千人。2007年3月に発生した能登半島地震で甚大な被害を受けた。
輪島市の中心市街地を構成する鳳至町（ふげしまち）と河井町は、木造住宅が密集しており、敷地内の奥部に土蔵が建っている。これは、「住前職後」（住まいは前に、仕事場は後ろに配置）という輪島独自の建築様式が基本にあり、輪島塗の仕上げ作業や製品の貯蔵のための土蔵は敷地の奥まったところに位置しているのが一般的である。
その中心市街地には、分業体制の輪島塗の各職種工房が数百軒密集して点在している。ただ、住宅と工房が一体化したのが一般的であり、外を歩いていてもどこが工房なのかわからない。今回、活動対象となっているほとんどの土蔵が立地しているのは、鳳至上町地区であり、輪島市の中で最も歴史的な建物が残っている地区である。

活動の概要 | 所有者から借用した土蔵を活用して、若手左官職人育成のための伝統的な工法による修復研修を行った。また、別の土蔵を活用して、これまでの輪島の左官技術の弱点を補うような、地震に強い塗り塀工法による修復研修も行った。一連の研修作業を通して、指導体制が整い、意欲的な左官職人の参加が固定化され、下作業を手伝う多くの一般ボランティアの参加を得ることができた。



廃棄物扱いとなる損壊土蔵

上記の点検活動が軌道に乗りだした3週間後から、土蔵の修復を支援する活動へ重点を移していった。国や県の「被災者生活再建支援制度」の対象となるのは、あくまでも住宅であり、その再建・購入・補修のための費用が対象者に支払われるが、住宅以外の土蔵などの建物を修復することは対象外である。逆に、被災地の安全性を高める目的で、損壊した土蔵の解体撤去は「災害等廃棄物処理事業費国庫補助金」の対象事業となり、その所有者は金銭的な負担が一切なく土蔵を取り除くことができる。精神的なダメージを受け、これからの生活に不安を抱えた被災者は、こぞって解体申請を提出し、1年間に約600棟の土蔵が輪島の街から姿を消した。その事業には25億円余りの税金が投入されている。

地場産業の消滅を防ぐ

輪島のまちなかに点在する土蔵の多くは、一般の道具蔵とは異なり、輪島塗の貯蔵や製造のための産業基盤である。土蔵がどんどん消滅する光景を目の当たりにした市民有志らは、街並みの消失ということ以上に、地場産業の根幹が揺らいでしまうことに強い危機感を覚え、土蔵を簡単に取り壊すのではなく、それらを修復していくことを技術的に支援するための組織「輪島土蔵修復支援活動実行委員会」を結成して活動を始めた。同年10月「NPO 法人輪島土蔵文化研究会」(以下、土蔵研)を設立した。



左官職人が研修に集中できるように、通行障害となっていた倉庫を取り壊し移設して作業用の通路を確保し、土を運び、縄を切り、内側の土を整え、作業場を清掃する。一般ボランティアの「下作業」があつての活動である。過酷で重労働な作業も楽しんでしまう気持ちが、この活動を継続させてきた。

活動内容

研修蔵を得るまでの道程

住宅点検調査リストから土蔵を抽出し、39軒74棟の実態調査を行い、被災した土蔵の状態を把握した。その後、調査報告会を開催し、損壊の原因と修復方法を所有者に提示した。所有者自身が修復の意志を持っている場合もあったが、使用していなかったことから取り壊しの危機に瀕した土蔵もあった。そのような土蔵の所有者に、「私達に無償で貸してください。私達が修復して活用します。期限は10年です。」と説得して回った。とりあえず救済することになった土蔵は、所有者が自己負担で修復する土蔵(6棟)、市が修復する土蔵(2棟)、そして、所有者から借用して土蔵研が修復活用する土蔵(3棟)、あわせて11棟にのぼった。そして、所有者から借用した土蔵の1棟(天野邸)を左官技術研修蔵として活用することとした。理由として、構造がしっかりしているので壁土を新たに塗っていく作業がすぐに行えること、蔵までのアプローチがわかりやすく、かえって参加者が限定される研修蔵には向いていると判断したことによる。

2008年度

2008年度の活動は、すべて天野邸土蔵(3つ並んでいる土蔵のうち2つを借用)を中心に行った。

○左官職人との事業推進の打合せ

2008年6月29日(日) 13:00～15:30

参加者：左官職人・久住章氏、竹本茂之氏、島田宰任氏、建築家・小林吉則、事務局・水野雅男

内容：事業全体の進め方については、2つの土蔵のコントラストを付けて修復すること^{*}、中蔵は構造補強を前提として土壁に拘らないことなどの事務局案について了解を得た。

左官職人への協力要請については、全国の左官ボランティアに呼び掛けることを確認した。

工法については、竹加工業と連携して検討する。基本的には昨年度修復した大崎邸の構造を用いることを合意した。

※当初は、2つの土蔵を研修用とすることとしていたが、1つの土蔵は柱の傷みが激しかったため、当面は構造合板を貼って、その中を活用することとしている。

○現場実測・図面作成ワークショップ

2008年6月～7月の週末

参加者：金沢工業大学、金沢美術工芸大学、石川高等専門学校の学生5名 建築家・小林吉則

概要：天野邸の土蔵と近隣を含む敷地の実測、平面図、立面図などを作成した。

○近隣住民への事業内容説明会

2008年7月3日(木) 18:30～19:45

区長宅にて

参加者：近隣住民10名、建築家・小林吉則、事務局・水野雅男

背景：昨年度の震災復興支援作業で、剥離した壁土を解体し処分場へ運搬する際に、粉塵や騒音などで迷惑を掛けたことから、我々の活動に対して不信感を抱いていた。

説明概要：事業の目的、スケジュール、作業車両の動線、粉塵対策、修復後の利用等



○資材搬入通路確保のための工事

2008年8月1日(金)～18日(月)

参加者：学生ボランティア7名

概要：搬入路とする空き地の草刈り、砂利敷き隣接住宅の物置新築(移設)と旧建造物の解体撤去現場土蔵への足場設営

○下準備ワークショップ

2008年8月9日(土)～12日(火)

参加者：大学生ら一般ボランティアのべ20名

概要：昨年、剥離した壁土を撤去した前蔵が傾きだったので、残っていた1面の壁土を急遽解体撤去する必要が出てきたため、作業を行った。落とした土を土袋2千個に詰め、処分場へ軽トラックで運搬した。

○竹小舞かきワークショップ

2008年8月23日(土)～2009年3月22日(日)までの

全7回 延べ10日間

参加者：左官職人平均11人/回

一般ボランティア平均8人/回

作業概要：久住章氏による技術講習、墨付け、間渡し、縦竹、竹針づくり、扉の解体方法の検討、下げ縄

2009年度

○竹小舞かきワークショップ

天野邸土蔵・小西邸土蔵

2008年4月5日(日)～2009年3月7日(日)までの

全5回 延べ9日間

参加者：左官職人平均8人/回 一般ボランティア平均4人/回

作業概要：下げ縄、小舞かき

○土付けワークショップ

2009年5月3日(日)～2010年3月22日(祝・月)までの

全7回 延べ18日間

参加者：左官職人平均14人/回

一般ボランティア平均21人/回

作業概要：手打ち、塗り塀、大直し



左官職人を名乗るのに、土壁仕事をしていない、土蔵を作ったことがない。彼らのコンプレックスが、左官技術研修に通うエネルギーに変わった。若い職人や見習いが輪島まで通い続けた。その熱意に、親方は情熱を持って指導した。

活動の特徴など

○研修対象土蔵の拡大

当初は天野邸の土蔵を研修土蔵と想定して進めていたが、総監修・久住章氏の「別の工法の実習も行うべき」との提言から、小西邸土蔵の「塗り塀工法」にも取り組みはじめた。さらに、七尾邸土蔵も土壁仕上げとすることとなったため、天野邸土蔵の工法を再度確認する意味も込めて研修を進めている。

※土蔵研が活用した3棟の土蔵の概要

天野邸(質屋から材木商へ転向)：所有者から借用

七尾邸(輪島塗の塗師屋)：所有者から借用

小西邸(輪島塗の塗師屋)：所有者が自己負担で修復

○北陸3県の若手左官職人の参加者の定着化

北陸3県で10人余りの若手職人が、意欲的に研修会に参加している。結果、メンバーがある程度固定化され、技術もしっかりと修得されている。この研修プログラムを通じて、2人の若手が左官見習いになったこと、ふだんは土壁仕事ができない職人が研修を重ねて興味を抱きだしたことが大きな収穫である。

○ワークショップ・サポーターの拡大

研修作業の下作業(縄を切る、すさを切る、土を捏ねるなど)を手伝ってくれるサポートボランティアは昨年度以降も拡がっており、大学生を中心にリピーターが増えてきている。

○研修プログラムの実行体制(ネットワーク)の構築

総監修・久住章氏の指導のもと、竹本茂之氏(石川県)と島田宰任氏(福井県)の二人の講師による若手職人の指導体制が整った。

○地震に強い土壁構造の提案

久住章氏により、これまでの輪島(能登地域)の左官技術の弱点を補うような「地震に強い土壁構造」が4つ提案され^{*}、その技術を研修している。

※1. 従来工法に近いが古舞をきっちりと作り上げる工法

※2. 壁厚を薄くする工法

※3. 日干し煉瓦を積み上げていく工法

※4. 塗り塀工法(版築を積み上げていくような工法)



手打ちする「泥団子」は、手渡してリレーされ土蔵の中で待機。

活動してよかったこと

これまで3年間に500人を超える方々が土蔵修復ワークショップに参加してくれた。しかも、何度も通ってくる常連メンバーが少なくない。参加された方々は、左官職人らとの協働作業の楽しさを味わっている。『職人仕事はカッコいいわ』『また来ますよ』という言葉聞いたときに、活動して良かったと感ずる。

以下に、お礼メールとはがきを紹介する。

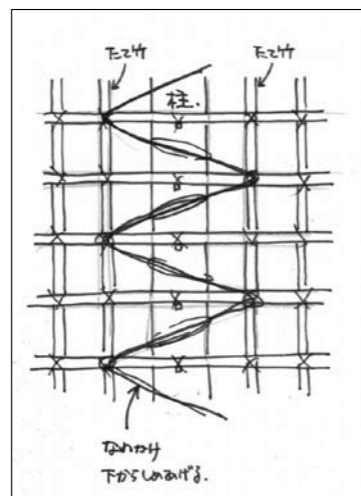
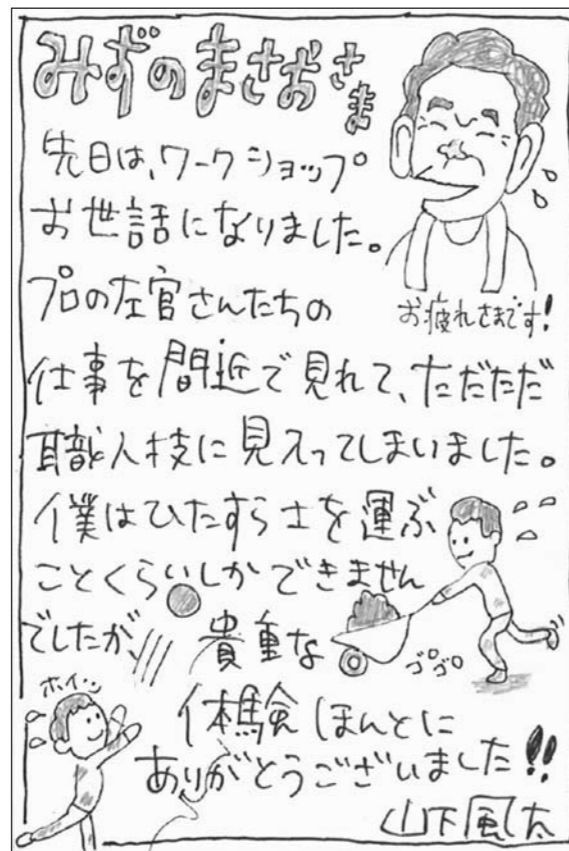
『沢山の貴重な体験をさせて頂き、今までに無かった経験を沢山する事ができました。ありがとうございました。』『一緒にいった同僚も大喜びでした。今日、会社でその話をしているというんな方が興味をしめしてくれました。私もすてきなご縁から情報を頂いて、こうして実際に参加できたことをとてもうれしく思っています。またこういう機会があればぜひ参加してみたいと思っています。参加している人たちも気持ちの良い方ばかりでしたね。取り急ぎお礼を言わせてください。またすぐにお会いしましょう!』

課題など

当初は、竹小舞掻きや手打ち、大直しなどの技術を記録し、資料として配付することを予定していた。しかし、縄の掻き方はとても複雑で、数種類の掻き方を組み合わせていることから図化するのが容易ではなかった。さらに、職人でも一度覚えた掻き方などの技術は次回には忘れていることも少なくなく、何度も実習することで「体得する」しかないのが現実であった。土の作り方や塗り方なども、材料によって特性が異なり、天候などによっても左右されるものであり、経験則で行われていたため、資料化することは困難であった。

このようなことから、研修プログラムを資料化することができなかつた点が反省材料である。

下図は、小舞掻きの一部を図化したものであるが、最終段階ではもっと複雑であり、縄の掻き方(編み方)を図化するの難しい。



竹小舞の構造の図化は容易ではない、伝承しかない。



留学生も日本の建築文化を肌で感じ取った。



縄の掻き方は何度も経験しないと身体で覚えられない。



今回の能登半島地震は、能登地域の土蔵を作ってきた工法の弱点を露呈させた。再び地震が起きても壊れない土蔵へ。そのために幾多の技術的な改良を加えた。竹小舞だけでも地震に耐えられるようなものを目指した。

収益事業としての事業性について

左官技術研修事業自体の採算性を取ることは当初から想定はしていない。土蔵研は、技術を研修するための「場」「指導者」「材料」「宿舍」などを若手職人(左官見習い)に提供している。当初は研修参加費を徴収することも検討したが、若手職人には経済的な余裕がないので難しいと判断した。土蔵研は、左官職人を研修しながら土蔵の修復も行うことを狙っているため、左官職人が集まりやすい条件を整えることを優先した。

土蔵研のその他の事業には、土蔵レストラン(2010年末完成予定)の運営や「土蔵・工房見学コンシェルジュ事業」がある。前者は、ワンディ・シェフ(金沢などで飲食店を営んでいるシェフが定休日を利用してここで臨時営業するという形態)で営業することを予定しており、その社会実験(土蔵レストラン向かいの交流施設で、イタリアンや日本蕎麦の調理人が輪島塗の器と輪島の食材でもてなす会)を2010年2月に3回実施し、可能性と課題を検証した。後者については、見学に協力いただける工房をリストアップし、プライベートツアーのコーディネートをしつつ始めている。

上記の事業はいずれも収益性が低い。そのため、新しい形の寄付システムを構築して活動資金を集めている。「土蔵へどうぞⅠ(一般の人から一口3万円で土蔵の修復活動資金を徴収するシステム。支援者には輪島塗の器や日本酒がプレゼントされる。)」には、200口の寄付協力をいただくことができ、寄付者と寄付を受けた方(塗師屋や酒蔵)とコミュニケーションが深められている。その第二弾の寄付システムとして、「土蔵へどうぞⅡ」の準備が整った。これは、webで告知し、5千円からの小口から受け付け、レストランとして活用予定の土蔵から被災後に救出された輪島塗の器を、プレゼントするというものだ。

今後の予定

○左官技術研修プログラムの継続

左官技術研修場と位置づけている天野邸土蔵において、漆喰仕上げや扉の制作などへと、研修プログラムを引き続き推進していく。

○土蔵レストランの開業

土蔵レストランを2010年末までに竣工して、「ワンデイ・シェフ」（金沢など輪島市外のレストランシェフが1日あるいは数日間限定で、交代で営業するスタイル）として開業する予定である。それは、輪島産、輪島の食材と地酒を用いてシェフが新しいメニューにチャレンジするものであり、客は輪島の新しいスタイルの食文化に触れることができる場となる。

○土蔵・工房見学コンシェルジュ事業

修復した土蔵や輪島塗の各種工房（分業体制となっている木地、下地塗り、上塗り、蒔絵などの加飾）の見学を希望する観光客（団体ツアー客でない個人やグループ客）用のプライベートツアーを提供する準備が整っているので、その事業化を進める。

拠点づくりというハード面の整備と同時に、上記のような人材育成やサービス事業を展開することで、総合的なまちづくり活動を継続的に推進していく。

土蔵を形作る土壁はもの凄いの量の土が塗り重ねられる。その土は捏ね場から一輪車や軽トラックで現場へ運び、人から人へ手渡されていく。機械化が進んだ社会において、いまだに原始的な手作業の積み重ね。左官職人と一般ボランティアの想いと力仕事の結晶が土蔵である。



他のNPOに伝えたいこと

地震の被災地の復興支援活動を、市民（セクター）の立場から、まちづくりの観点で取り組むことで、活動の使命（ミッション）をより高度なものへと引き上げられることを社会に提示できた。私どもの活動は、以下の点でユニークさを発揮しているものと考えられる。

○被災した土蔵群を輪島固有の都市資産と位置づけて、被災前とは異なる方向性を持った新たなまちづくり資源に蘇生（倉庫→ギャラリーなど）している。傍観すれば取り壊される運命にあった被災土蔵はある意味で負の資産であったが、地域の固有性を発揮するための有効なプラスの資産と捉えた発想の転換が重要であった。

○修復活動を進める中で、左官職人で土蔵を手掛けたことのある人が僅かしかいないことを把握した。その社会的な課題を解決すべく、定期借用することになった土蔵を左官技術研修場として提供することにした。土蔵本体で技術研修プログラムを実施するのは我が国初の試みである。このように、社会的な課題を的確に把握して臨機応変に活動を展開する柔軟さも大切である。

○土蔵づくりは本来、左官職人と一般市民との協働作業で進められるものであり、今回の土蔵修復事業においても左官職人と一般ボランティアとの協働作業（ワークショップ）で進めてきた。一般ボランティアは、左官職人の鏝さばきを間近で観察し、その仕事ぶりに触れることにより、彼らへの尊敬の念が構築されるとともに、彼ら自身の職人としての自尊心も強めることに繋がった。プロとアマチュアとで常に進めていく、ワークショップのコーディネートも重要である。

○活動資金の無い中で、使命感に燃えて活動が始まり、3年間事業を継続的に推進してきた。国や財団などからの公的な支援を受けられたことが、活動の基盤となっているが、「土蔵どうぞ」という新しい寄付システムを構築して実行することで、市民から資金面で広く支援してもらうことができた。補助金や活動助成金への申請も含めて、資金を獲得するための広報力や企画力を堅持することも必要不可欠な能力である。

